

ウメ苗木の多側枝整枝法で早期収量アップ

1 はじめに

果樹では苗木を植えてから販売収入が必要経費を上回るまでの間を育成期間といい、ウメは7~8年もかかります。また、本県が育成した多収性品種‘新平太夫’や‘福太夫’は樹勢が強く、植え付け間もない時期には花芽がつきにくい特性があります。そこで、早期収量向上を図るため、‘新平太夫’による多側枝整枝法を開発したので紹介します。

2 3年生樹から慣行の5倍の収量が得られます。

‘新平太夫’の整枝法を慣行の開心自然形3本主枝に加え、できる限り多くの側枝を残す多側枝整枝法にすると、慣行整枝法に比べて果実は約15%小さくなりますが、3~5倍の収量が得られます(図1~3)。

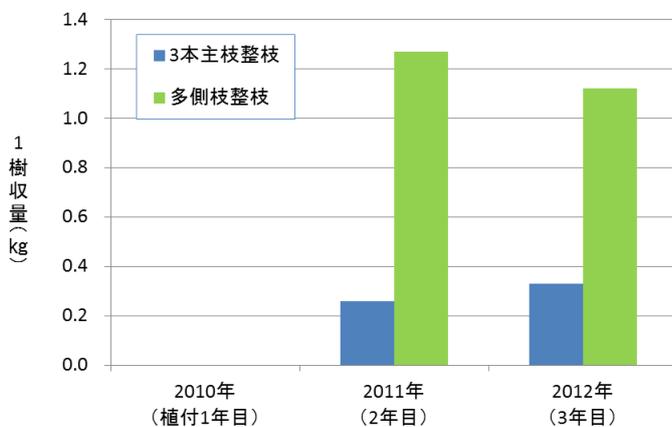
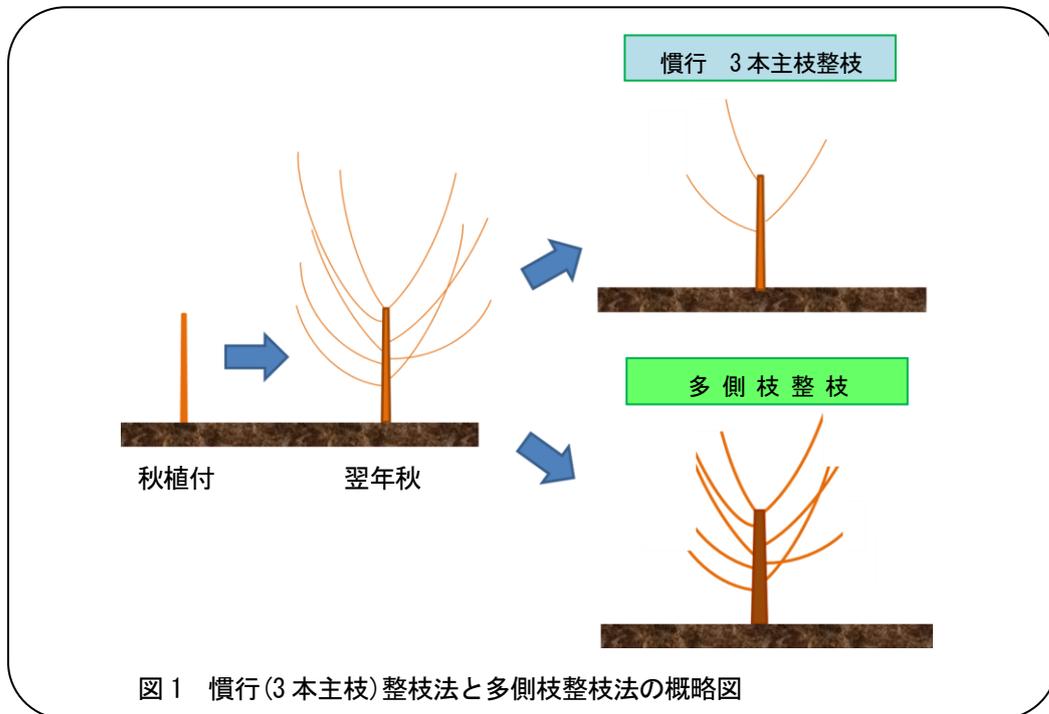


図2 整枝法の違いが収量に及ぼす影響 (2012)

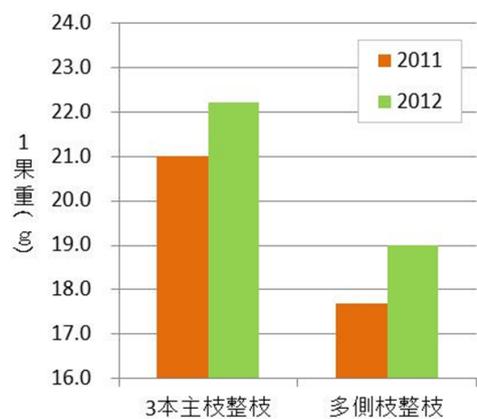


図3 整枝法の違いが果実の大きさに及ぼす影響 (2012)

さらに通常の植え付け（8m×8m間隔：15本/10a）から密植（50本/10a）にすることにより、10a当たりの収量を大幅に増やすことができます。3、4年生樹の2年間で10a当たり換算累積収量は慣行整枝法の13倍にもなります（図4）。

また、多側枝整枝法により樹冠の拡大は促進されます（写真1～4）。多側枝整枝法により慣行整枝法に比べて新梢は数多く発生し、新梢長も長くなりますが、平均新梢長は約1/3と短くなります（表1）。樹高に差はみられませんが、樹幅や幹周は大きくなります。

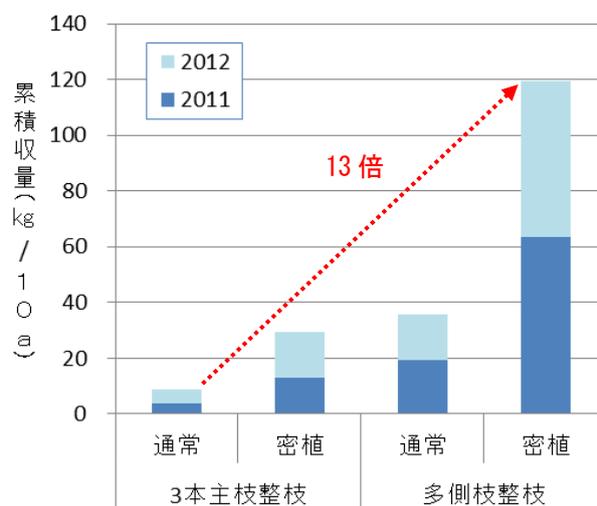


図4 整枝法および栽植密度の違いが累積収量に及ぼす影響（2012）



写真1 慣行3本主枝整枝4年生



写真2 同左 落葉後の状態



写真3 多側枝整枝4年生



写真4 同左 落葉後の状態

表1 整枝法の違いが生育に及ぼす影響（2012）

整枝法	新梢数 (本)	総新梢長 (m)	平均新梢長 (cm)	樹高 (cm)	樹幅(cm)		幹周 (cm)	2010-2012 肥大率(倍)
					東西	南北		
多側枝整枝	2067	304	14.7	284	308	330	27.1	2.2
3本主枝整枝	380	150	39.5	287	219	278	21.7	1.9
対比(%)	544	203	37	99	141	119	125	116

3 定植後の管理

‘新平太夫’は樹勢が強いので肥料は植え付け時の肥料以外は施用しません。そのため、植穴は十分な大きさを確保し、基準となっている肥料や土壌改良資材を適正に投入します。

4年生樹にもなるとそれぞれの側枝から発生する新梢がきわめて増加します。そのため枝の交差が多くなり、接触交差枝が慣行整枝に比べて1.8倍（1樹当たり36本）も多くなるので、新梢が重ならないように秋冬期のせん定時に側枝を切り縮めます。

生育中は枝葉が繁茂しすぎないように摘心や夏季せん定を行うとともに、防除では薬液が十分かかるよう適切な防除を行います。

4 コスト面

密植で栽培を行う場合、密植により苗木代や肥料代等は多くかかりますが、多側枝整枝法により定植5年目（6年生樹）には販売収入がそれらの必要経費を上回るようになります。従来の慣行整枝法の通常植栽密度では、白干梅は10a当たり約1樽（3か年平均：A級品7705円/樽・10kg）しか出荷できませんが、多側枝整枝法では8樽も出荷できるからです。

[その他]

研究課題名：ウメの新改植を促進する若木養成技術の開発

研究期間：平成22年度～24年度

研究担当者：園芸試験場 ウメ研究G 冬廣吉朗